

教科書の中の宗教—この奇妙な実態

Religions in Textbooks: The Actual Conditions in Oddness

藤原 聖子 / 2011 岩波書店

FUJIWARA, Satoko / 2011 Iwanami Shoten

新井 元 ARAI, Hajime

● 国際基督教大学教育研究所

Institute for Educational Research and Service, International Christian University

評者は、プロテスタント系の私立高校出身である。そこでは倫理の授業の代わりに「キリスト教」の授業が週一回あって、結構楽しみにしていた。宗教科の教員免許を持っている牧師先生が担当で、「高校を卒業するまでに聖書くらい一回は通して読んでおけ」と言われたので、純情だった評者は「そんなもんか」と思い、卒業までに生真面目に聖書を通読した。ただし、それで人格が陶冶されたという事は無く、すっかり屈折した人間になってしまったが、これはキリスト教のせいではなく、学校が男子校だったからだと思う。思春期における異性の目は、結構大事なのではないだろうか。ともかく、そんな訳で評者はいわゆる授業としての「倫理」というものを受けた事が無い。そこで、日本の公立学校では、一体どのように宗教について教えているのか興味があって本書を手にとった。

本書の構成は以下の通り。

- 1章 教科書が推進する宗教教育—日本は本当に政教分離か
- 2章 なぜ宗派教育的なのか
- 3章 教科書が内包する宗教差別

4章 なぜ偏見・差別が見逃されてきたのか

5章 海外の論争と試行錯誤

6章 宗教を語りなおすために

比較宗教学者である著者がこの本を書くに到った経緯は、協同研究で諸外国の教科書がどのように宗教を記述しているかを見、また日本の高校の「倫理」教科書の改訂作業に関わったことから、その中の宗教に関する記述を読んで、政教分離を前提とする日本の教科書が実はそうではないということに気づいたという事から始まっている。ここで、著者が言う政教分離の原則を踏み越えているというのは、「宗教に関する記述が中立的・客観的でないという意味」とのことである。

2006年に教育基本法が改定され、その第15条は「宗教に関する寛容の態度、宗教に関する一般的な教養及び宗教の社会生活に置ける地位は、教育上尊重されなければならない」となった。そこで、新学習指導要領では宗教に関する記述が中学・高校の社会系の科目全体で増えたいらしい。「倫理」の教科書では、全体の約三割の部分で宗教を扱っているが、そこに問題が潜んでいるというのが著者の見立てである。教科書の宗教に関す

る記述の問題性を大きく二つに分け、一つは「教科書が、意図的ではなく結果的に、特定の宗教的信仰を受け入れさせようとしてしまっている問題」で、もう一つを「教科書がある宗教を他の宗教よりすぐれているとしたり、逆にある宗教に対し差別的な偏見を示している問題」としている。それぞれの具体例が第1章、第3章で取り上げられており、その原因が第2章、第4章で考察されるという構成になっている。第5章で海外の事例をあげ、第6章で「日本ではどうすればよいのか、そして学校教育という場で教育を語るとはそもそもどういうことなのか」を論じている。

端的に言って、最初の問題の原因はその記述スタイルにある。つまり、倫理の教科書は基本的に哲学史・思想史の形をとっているの、そこでの「先哲に学ぶ」スタイルを取ると、ソクラテスやプラトンといった思想家とイエスや仏陀が同列に学ぶべき対象となり、彼らの思想に私たちが学びましょうという事で、結果として教科書の読者（つまり中高生）にキリスト教や仏教を宗派教育的に伝えることになってしまっているという。また、二つ目の問題の原因は、ユダヤ教とキリスト教やヒンドゥー教と仏教というように相前後する各宗教間での、後者は前者を乗り越えたとか後者は前者を歴史舞台から追い出したというような歴史観からきているという（それぞれ「勝利主義」「置換主義」と呼ばれる）。こうした見方は、比較宗教学者の著者に言わせると数十年も前の見解であって、宗教界では自覚的に反省されている。しかも、この勝利主義や置換主義は、仏教というひとつのカテゴリの中でさえ、上座部仏教や大乘仏教、平安仏教と鎌倉仏教の間にも見られるという。さらに世界宗教と民族宗教という枠組みまであって、たしかに宗教を中立的に扱うという意味では、日本の倫理の教科書の記述は問題だけである。こうした問題の原因として、教科書検定の仕組みの問題や、分担制という執筆方法、さらに教科書会社が、採択数を増やそうとしてセンター試験の出題傾向に合わせようとする動きもあり、なかなか首尾一貫した記述がしにくい等の理由があげられている。

比較宗教学者として、こうした問題が目につくのは分かる。しかし、著者も述べているように、第5章で取り上げられているような海外の事例をそのまま日本で採用したとして、それが教材として適切とも思えない。それは、学習指導要領やセンター試験の出題傾向に沿った教科書が現場では望まれているということ以上に、こうした海外の教科書や授業研究の事例を見て痛感するのは、日本では、宗教を身体化した人々による衝突自体が生活のレベルにおいて決定的に少ないという現実があるように思われる（勿論、無い訳ではないが）。著者によれば、日本の倫理教科書はキリスト教と仏教を対決させたがるものが多いらしいが、イスラムはその土俵にさえ乗せてもらえず、「他者ですらないイスラム」（p.92）ということになっている。であれば、キリスト教も仏教も日本では所詮他者でしかないということである。考えてみて欲しい。現在の日本でどれだけの人間が仏教徒としての戒律を守って生きているのか。よく言われるように、日本のクリスチャン人口はカトリック、プロテスタント合わせても1%そこそこのものである。著者は、ある都立高校の教師から、倫理の授業でキリスト教の箇所でもメル＝ギブソン監督の『パッション』（2004）を観せると聞いて当惑したという。この映画の中のユダヤ人の描かれ方が欧米で問題になったとか、凄惨なシーンが多いのでキリスト教のイメージ形成への影響が心配とか、当惑の仕方がいかにも大学の先生らしい（評者としては、映画全編を観せるとただでさえ少ない倫理の授業の数時間を使うことになるので、他の单元との時間配分とか大丈夫なの？と思った）。この映画を撮り終えた後、メル＝ギブソンはユダヤ人への差別発言で問題になりラビに謝罪したりしていたが、そういった事を含めて教えるようなことが出来れば、教材がなんであれ学習としては意義深いものとなるのではないか。その後に「この例は、個人の個別の努力だけではなく、教員間や教員—研究者間の交流も必要であることを示唆している」（p.203）とあるが、その解決策の具体例が国連の「諸宗教と諸信仰に関する教育」インターネット情報センターとなると、

日本の現場の教員に本当に役立つものなのか、これまたちょっと疑わしい。日本でも2011年から宗教学の大学教員が中心となって、宗教文化教育推進センターとHPを立ち上げたそうだが、これも本書で指摘されたような問題を捉えてなければ、倫理教科書の問題がそのままネット上に移植されるだけだし、また海外の先行事例に学ぶという単純な内容ならば、やはりその実効性に問題があるだろう（そうでないとは願うが）。ただ、どうせ高校生や大学生に観てもらうなら『パッション』よりは『モーガン・スパーロックの30デイズ』Vol.2の中の「第3話 イスラム修行を30日間」（2005年アメリカ／モーガン＝スパーロック監督）が面白くていいと思う。生身の人間が宗教的に生きるという事はどういう事か分かるし、文化衝突の事例としても説教くさくなく後味も爽やかなドキュメンタリーになっている。本編は正味50分程度で、授業時間にも丁度収まるので先生方にもお勧めである。

評者にとって、本書で一番興味深かったのは第3章の神道に関する部分であった。「日本の倫理教科書を外国人がみた場合、おそらくもっとも奇異に映るであろうことの一つは、ユダヤ教、キリスト教、イスラム、ヒンドゥー教、仏教、儒教・道教と続くのに、「神道」が出てこないことである」（p.102）。評者は日本人だが確かに「もっとも奇異」である。勿論、「神道」が項目として成り立たない訳ではない。『現代宗教辞典』（井上順考編、弘文堂、2005）には「神道」の項目があり、『A New Dictionary of Religion』（J.R.Hinnells, Blackwell, 1995）には「Shinto」の項目がある。日本の宗教は、多くの教科書の中で「国際社会に生きる日本人としての自覚」を育てるという章で取り上げられるが、この「神道タブー」は倫理教科書に留まらず、日本史の教科書にも神道という言葉は出てこない（復古神道や神道国教化という文脈では出てくる）。著者に言わせれば「これはもう、意図的な排除とみるしかない」（p.105）らしいが、その原因として「戦後、神道を教えることが文部省でも教育界でもタブーとなってきた」ことを上げているが、この後を読んでも何故タ

ブーなのかがよく分からない。「教科書の神道タブーは、文部省や教育界でタブーとされてきたから」では何も説明していないのと同じであるが、比較宗教学者にこういう説明をされてもそれこそ読者は当惑するしかない。神道タブーの理由もタブーなのだろうか？これは戦後のみならず、近代の日本が抱える天皇制と政教分離の問題がまだ解決されていないからというのがその理由なのではないだろうか。八木公生はその著書『天皇と日本の近代（下）』（講談社、2001）の中で次のように述べている。「天皇の祭祀が宗教、ないしはその日本的な代用行為（超宗教）として把握されてゆく背景のひとつに、宗教ということば自体の成立と定着にかかわる思潮があったことは確かなのだ。この観点からみれば、少なくとも、日本語の宗教ということばが、けっして日本における歴史的な信仰のありように正確に照応し、それを的確に表現することばではないことは疑いない。信心と信仰との間にある埋めがたいニュアンスのちがいは、その何よりの徴表であろう」。学習指導要領や現行教科書の神道に関するタブーは、（意図的かどうかはともかく）それを的確に反映したものだ。神道を「宗教」として取り上げてしまうと、天皇にまつわる様々な行為や習慣がいきなり「宗教的」になってしまい、それこそ日本は政教分離なの？と疑問を持つ中学生や高校生が出てくるだろう。皇室祭祀は「神社のような建物である宮中三殿を中心に、平安時代から伝わる、神社の神職のような古式装束を天皇が着て祭儀を行なう」（下線引用者）というが（『天皇陛下の全仕事』山本雅人著、講談社、2009）、宮中三殿の神職は、戦前は宮内省の職員だったが、戦後は皇室のプライベートな行事とされた事で、公務員ではなく、天皇が「内廷費」で雇用するという形になっている。こうした状態が、果たして政教分離の原則に反しているのか、いないのか。現行の教科書は、近代日本の抱えた未解決のままの宿題から絶妙な距離を置いたものとなっているのである。

何かを語るという事、あるいは何も語らないという事で、教科書が国体護持の役目をしっかりと

果たしていることが問題なのではない（そうした例は海外も含め沢山ある）。そうした構図が問題にならないことこそ「奇妙な実態」と呼ぶに相応しい。著者は、本書の結びにこうも書いている。「重要なのは、教科書の一つ一つの記述が、どのような価値観に基づいているのかを意識することである。意識すればそこから距離をとり、自由になることも可能である。逆に、より自覚的に、説明責任を果たしつつその価値を実現することも可能になる」（p.222）。そうであれば、「記述されないこと」がどのような価値観に基づいているかを知る事にも意義があるだろう。比較宗教学者の著者にこそ、この神道タブーによる教科書の「寡黙」が語りうる事についてもっと深く分析して欲しかったが、それはこうした小さな本（新書）では難しく、またテーマとしては別物という意識があったのかも知れない。同著者による『世界の教科書で読む〈宗教〉』（ちくまプリマー新書）を読むと、各国の教科書の内容がより具体的に分かり、本書の意図するところもより理解しやすくなると思うので、そちらも読んでもらいたい。

ところで、今度の新学習指導要領により、2012年度から中学校保健体育で武道が男女共に必修となった。文部科学省に言わせると「武道は（中略）我が国固有の文化であり、武道に積極的に取り組むことを通して、武道の伝統的な考え方を理解し、相手を尊重して練習や試合ができるようにすることを重視する運動です」という事になるらしい。武道必修化については、すでに様々な観点から問題が指摘されているが、評者が心配するのは授業としての武道を当然拒否するであろう「エホバの証人」の子弟への学校側の対応である。日本の学校（ここには教員も生徒も保護者も含まれる）は、果たして「相手を尊重して練習や試合」を受けない権利を認めるだろうか。言うまでもないが、他者の信仰への対応や異文化理解を学ぶことが出来るのは教科書によってだけではない。日本社会の寛容性（あるいは非寛容性）が問われるのはこうした現実と直面した時であり、生徒はその時こそ様々なことを学ぶのだと思う。